

The Mortal Coil の文体とシンボリズム

D.H.Lawrence's Symbolism in *The Mortal Coil*

西村道信
NISHIMURA Michinobu

1.0 はじめに

D.H.ローレンスに興味を持っている読者にはすでに周知のごとく、この作家の作品には至る所に「ヘビ」のイメージが散りばめられている。しかしながら、一読した限りでは、どこにそのイメージが描かれているのか気が付かないことが多い。よほど入念に読み込まなければそれを見過ごしてしまう可能性の方が高いからである。その最大の理由は、ローレンスがsnakeやserpentといったヘビを表す語を使用せず、抽象的にただヘビを暗示する語句を使用して、読者の創造力の内にイメージを描かせるという手法を取っているからである。

こういう点を踏まえながら、彼の*The Mortal Coil*という作品を例に取り、ヘビのイメージが現れる箇所のうち、代表的と思われる部分を導きだして、文体論の面から考察して行く。

2.0 作品について

2.1 創作年代

ローレンスがこの作品を描くようになった背景には、*English Review*に2つの兵士もの(soldier stories)が載せられたことで気持ちがその方向に傾いていたからであろう¹⁾。

ところで、最初にこの作品が描かれたのは、1913年10月のことで、ある逸話をもとにしている。Richthofenという男爵は大変なギャンブラーであったが、女性に関する事件にも係わらず、なんとか職務を維持したというものである²⁾。ローレンスはこの逸話に彼独自の脚色を加え、自分なりの物語に仕上げている。

1916年になって、ローレンスはこの作品を書き改め、*Seven Arts*という雑誌にこれを掲載した。本論文で取り扱うテキストはこの版を用いた。

この*The Mortal Coil*という作品は、ローレンスの存命中には短編集の中には載せられなかった。というのは、1921年に彼はこの作品をすっかり書き換えて、新たに*The Captain's Doll*という中編小説として発表したからである。

2.2 作品のあらすじ

この作品は、上述のごとく兵士ものの短編の内の1つであるが、士官のFriedeburgとその恋人であるMartaが中心となって物語が展開して行く。

Friedeburgは軍人ながら大のギャンブラーで、あまり負けて大きな借金を作ってしまったために、軍隊から追放される運命にある。だが、名誉を男の価値の中でも一番のものと考えている彼には、軍隊を追われることは死を宣告されたと同じであり、死ぬほどの苦しみを味わうことになる。ところが、恋人のMartaにはそんな彼の気持ちが理解できない。彼女にとっては、軍隊を追われてもFriedeburgは彼自身であるし、人間として何ら変わるところはないと考えている。彼は他の仕事を何かすればよいのである。この2者の考え方の間にある間隙は決して埋められることはないのである。

彼が職務で出ている間に、彼の部屋で恋人のMartaとその友人のReserieが、ストーブをつけたまま寝ていたために窒息死してしまう。帰って来たFriedeburgは警察から事情聴取を受けることになる。彼にとっては、大借金の上にさらにこんな不名誉が重なり、もう終わりであると悟る。彼はもう死んでしまったも同然の人間となってしまったところで、この物語は終わっている。

2.3 *The Mortal Coil*の意味

この作品の題となっている *The Mortal Coil* という表現は、シェイクスピアのハムレットから引用されたものである³⁾。もともとはシェイクスピアがこの表現を考え出し、その後一般的に使用されるに至ったものである⁴⁾。この表現はたいてい「浮世の煩わしさ」という意味で使用されているが、ローレンスはそのような意味でこの表現を使用しているとは思えない。そのようなごく普通の意味ではなくて、もっと深い何か作家ローレンスの心の裡にある、人間にとって本質的なものを顕現させていると考えた方が納得ができると思われるのである。

3.0 「ヘビ」とローレンス

3.1 ヘビのイメージ

最初にも述べたごとく、ローレンスは作品中にヘビのイメージを点在させているのに、ヘビという単語を出していないことが多い。筆者はsnakeやserpentのような語を出さずにイメージ作りをしている方法を暗示的イメージ構成法と名付けているが、ここで取り扱っている作品もその構成法をとっている。

多くの研究家の知る通り、ローレンスにとってはヘビの存在が重要な要素となっているのである。それは彼の唱える精神と肉体の合一という、観念の中心をなすphallus⁵⁾を象徴するものであると考えているからに他ならないのである。

3.2 「ヘビ」とCoil

この小説の主人公Friedeburgの苦しみを、ローレンスはcoilという語で巧みに言い表している。このcoilという語はヘビがとぐろを巻くという意味が含まれている。語源的には、「騒ぎ、煩わしさ」を意味するcoilと「ヘビがとぐろを巻く」を意味するcoilとは別の語と考えられているが、読者にとってはどちらも現代英語ではcoilという1語になっているところから、ある種の意味上のオーバーラップが生ずる。ローレンスの狙いはここにあったのだらうと推測されるのである。

3.3 MortalのRejuvenation

ローレンスは、上記のごとく、2つの意味をもつcoilという語を使用したのであるが、通常coilという語が「煩わしさ」などの意味を表す場合、「この世、浮世」を表すmortalという語を付加し、this mortal coilというような連語で使用される。ところが、ローレンスは又ここでも、mortalという語を「この世、浮世」という意味では使用していない。むしろ、mortalの本来の意味である「死ぬ、死すべき運命の」という意味で使用しているように思われるのである。それゆえ、mortal coilは「この世の煩わしさ」などという意味ではなく、文字通り「死すべき運命にある苦悩」という意味と解釈した方がよいであろう。このmortalという語の使用は、意味が本来の意味にまで遡って使用されていることになる。つまり意味の「若返り」(Rejuvenation)⁶⁾を生じさせている。それにより、この語はかえって強烈な意味合いを帯びて来るのである。

このような意味をもつmortal coilという表現を使用し、ローレンスは主人公のFriedeburgの苦悩を、ヘビのイメージと重ね合わせながら、描写しようとしているように思われる。

4.0 イメージとその形成

4.1 イメージとキーワード

イメージを形成するには、いかなる場合にも、やはり重要なキーワードが存在する。そのキーワードを見つけ出すための方法論も存在してはいるが⁷⁾、筆者の場合は専らテキストを読み込み、心に何か「カチッとくる」(inner click)⁸⁾語句が見い出せるまで、只管朗読という方法を取っている。そして見出した語句がその該当するイメージと重なり合い、そのイメージ形成にとって極めて関与的であることをもう一度確かめるのである。レオ・シュピッツァーはこれをphilological circle⁹⁾と呼んでいる。方法論的には非科学的な方法かも知れないが、文学理解という点からすると、発端がこの辺りに存在することがむしろ妥当であるとも考えられる。

4.2 コンピュータの利用

テキストを何度か読み、キーワードらしきものも探すことができたなら、精読と平行してコンピュータにテキストを入力して行く。そして入力しながらも、自分自身の見出したキーワードが間違いがないものかどうかを再確認する。

最終的にテキストの打ち込みが完了すると、以前に作成したプログラム¹⁰⁾を用いてキーワードを中心としたいくつか用意したフォーマットで出力をする¹¹⁾。そして出力している段階で、新たに別のキーワードが発見できたり、あるイメージに密接に関与する要素となる語句を見つけ出すこともある。

4.3 「ヘビ」とそのキーワード

この作品の中核を成すイメージは、やはりヘビのイメージであろう。このイメージを連想させるためにローレンスが好んで用いる語は、fascinate, eye(s), powerの3語である。その中でもfascinateという語が特に重要となる。fascinateは「人を魅了する」といった通常の一般的な意味での使用法ではなく、もっと本質的な強烈な意味をもっており、「人を魔力によって身動きできない状態にする」というような意味が込められているのである。

このfascinateという語を辞書で引いてみると、次のような例が見られる。

The serpent fascinates its prey, apparently by the power of his eyes.(OED)

この例からも理解できるように、fascinateはpowerやeyesと共に使用され、そのイメージを形成している。ヘビはカエルなどの獲物をただ目でじっと見つめただけで、その魔力的な力によってすべての力を相手から奪い去り、怯ませ、動けなくさせてしまうのである。fascinateという語の本来の意味はこれなのである。

このイメージをローレンスは、人間同志の関係にも当てはめ、巧みに人の心の動きを表現しようとしているのだと考えられる。この作品においても、ローレンスはfascinate, power, eyesの3語を用いており、登場人物の心理描写を見事に成功させたと言っても良いであろう。

これらの3語を中心として、ヘビとその魔力を連想させる語句は以下の通りである。
absorb, abstract, abstraction, arrest, attract, bound, cat, coil, contraction, cower, cryptically, dazzle, delirium, destroy, destruction, distant, doom, draw, dumbfounded, dumbly, ecstasy, enigmatically, exultancy, fatal, fatally, fate, fetters, fiendish, fix, flicker, glamour, immersion, intoxicate, intoxication, lose one's legs, magic, magical, marvellous, mastery, mindless, miraculous, motionless, narcotic, numb, numbness, perish, power, powerful, prisoner, quiver, round, shrink, shudder, silk, silkily, silky, spellbound, strange, strangely, strength, stupefaction, submission, submissiveness, superior, swoon,

大手前女子短期大学・大手前栄養文化学院・大手前ビジネス学院「研究集録」第15号（1995年）

tail, trance, transfix, tremble, triumphant, twist, uncanny, vibration, vigour, voluptuously, wall up, wince, wonder

4.4 関与的なイメージとそのキーワード

この作品には、ヘビのイメージとは別に他のいくつかのイメージが感じ取られる。別のイメージとはいっても、ヘビとは間接的に関わり合いをもっていると考えられる。

a) 裏切りに関するもの

cowardly, deceive, guilty, lie, sulphur-yellow, trick, yellow

これらの語の中、その中心となるキーワードはyellowである。キリスト教においては、yellowという色はキリストを裏切ったユダの着ていた服の色であり¹²⁾、裏切りの象徴となっているのである。

b) 苦悩に関するもの

agony, anguish, bother, calamity, cat, condemn, conflict, crisis, cross, Damocles, danger, dangerous, deadened, death, despair, desperately, desperation, die, disturb, fetters, heavy, helplessness, hurt, kill, knit, lacerate, load, martyr, misery, mortal, mortally, oppression, pain, pass away, pathetic, pathos, perish, perturbation, shoot oneself, suspense, sword, tears, tense, tension, thorn, thrust, torture, tragedy, tragic, trouble, unbreathable, weariness

これらの語の中で特に注目すべきはDamoclesであろう。これについては後述する。

c) 不安、心の動揺に関するもの

afraid, amazement, anxiety, apprehension, blanch, chaos, doubt, dread, falter, fear, fretted, frighten, grey, hang over, hesitate, irritably, irritate, irritation, pale, solicitous, uneasiness, uneasy, wrinkle

d) 愛に関するもの

blossom, cactus, candlelight, care, crimson, fiery, flame, flower-like, gentle, glow, kiss, love, lovely, red, scarlet, soft, softly, tender, tenderly, tenderness, touch

e) 名誉、不名誉に関するもの

annihilate, cheap, cipher, common, criminal, debts, despicable, dirty, distinction, downfall, expulsion, gentleman, honour, hurt, ignominy, inky, kick out, little, magnificent, manhood, menial, nothing, petty, pride, proud, rag, ruin, shame, something, stupid, subervient, surbordinate, tuppenny, turn out, vain, value, vanity, wound, wretched

5.0 関与的なイメージとその検証

5.1 キーワードとコンテキスト

関与的なイメージのキーワードが、実際にはどのようなコンテキストで使用され、それによって読者はどのような印象をもつかを例証して行く。ただし、あるキーワードが複数のイメージにオーバーラップすることもある。それがあるイメージと別のイメージとを有機的に結び付ける役目を果たしているのである。

コンピュータでの出力¹³⁾を資料として最後に提示してある。ここでは、具体的にそのものを表すというよりも、抽象的にそのイメージを形成しているものを中心に例証して行くことにする。

5.2 裏切りとyellow

ローレンスの文学を理解するためには、キリスト教と彼の思想とを対比することが必要となってくる。その意味でも聖書に関係する表現や語句には特に注意をすべきである。

ここではユダの裏切りを表すyellow¹⁴⁾を例に取り、そのコンテキストを検証する(→資料1)。

He had beautiful hands, and the big topaz signet-ring on his finger made yellow lights. Ah, if only his hands were really dare-devil and reckless! They always seemed so guilty, so cowardly. (p.215)

彼(Friedeburg)は彼女(Matira)を愛していると言っているが、実は本当には愛していない。その行為は裏切りの罪深い行為なのであるとMartaは考えている。キーワードとしては、yellow, guilty, cowardlyに注目すれば分かるであろう。

さらに次の例と比較して見れば、それが決定的となってくる(→資料2)。

'You've deceived me,' she said, as she sat beside him.

'Have I? Then I've deceived myself.' His body felt so charged with male vigour, he was almost laughing in his strength. (p.222)

5.3 苦悩とダモクレスの剣

主人公の苦悩を最もよく表している語はtortureであろう。この語は題となっている *The Mortal Coil* の内容を包括的に伝えていると考えられる（→資料3）。そして彼の苦悩と屈辱が頂点に達する場面で、ローレンスはダモクレスの剣¹⁵⁾の逸話を読者に重い起こさせる。ローレンスは何か決定的に重要な場面になると、しばしば神話や伝説を用いる傾向がある¹⁶⁾。恐らく、神話や伝説には何か謎めいた神秘的な力、魔力とも言える力が作用していて運命的にこの世を支配している、という考えがローレンスの心の中にあったのだと考えられる。そして、その魔力とはヘビのもつ魔力と結び付いているのである。

ここの場面でも、ギリシャ伝説を主人公の苦悩の決定的とも言える瞬間に巧みに利用して、そのイメージの効果を最大限にまで引き出すことに成功しているのである。

The sword of Damocles that had hung over his heart, fell. (p.229)

ダモクレスの剣を主語とし、それに関係詞節を続け、述語はfellという動詞1語のみという文構成を用いている。即ち、読者の注意と緊張を長く保たせ、fellの1語で一気にその緊張を解き放つこの手法は、この場面展開からすれば絶妙とも言える文体であろう。これによって、Friedeburgの立場は絶望となるのである（→資料4）。

5.4 不安、陰鬱さとgrey

物語全体を通して、登場人物の不安や陰鬱さを象徴しているのがgreyという語であろう。内容から考えてみれば、主人公は特に心理状態が終始不安と陰鬱さに包まれているであろうから、この内容に関する語句は当然多くなることが予想される。そしてそれらの語句をイメージの面から代表しているのがgreyなのである（→資料5）。

5.5 愛とtenderness

ローレンスは愛について描く場合には、他のいろいろな作品の中においても¹⁷⁾、tendernessという語をよく使用する。もちろん、tender, tenderlyという形でも使用されるが、ローレンスにとっては、この語のもつ意味内容が極めて深いのである。現在のキリスト教では決して成就し得ない真の愛、真の優しさから生まれる愛を表しているのがこの語なのである。同じくその意味ではtouchも重要となる。

ところで、ローレンスは燃えるような愛の象徴として赤い色や燃える炎を使用することが多い。又、女性の優しさや愛を表すのに花を象徴的に用いている。この物語でも、cactusとscarlet blossomという語句が見られるが、cactusは「暖み、熱愛」などを象徴するものと考えられており、真にscarletとblossomというコロケーションはうまく当てはまっている。そして、Martaという女性のFriedeburgに寄せる愛が、非常に激しく熱烈であることを暗示しているように思われる（→資料6）。

The Mortal Coil の文体とシンボリズム

About her the room glowed softly, reflecting the candlelight from its whitewashed walls, and from the great, bowed, whitewashed ceiling. It was a large attic, with two windows, and the ceiling curving down on either side, so that both the far walls were low. Against one, on one side, was a single bed, opened for the night, the white over-bolster piled back. Not far from this was the iron stove. Near the window closest to the bed was a table with writing materials, and a handsome cactus-plant with clear scarlet blossoms threw its bizzar shadow on the wall. There was another table near the second window, and opposite was the door on which hung a military cloak. Along the far wall, were guns and fishing-tackle, and some clothes too, hung on pegs — all men's clothes, all military. It was evidently the room of a man, probably a young lieutenant.

The girl, in her pure red dress that fell about her feet, so that she looked a woman, not a girl, at last broke from her abstraction and went aimlessly to the writing-table. Her mouth was closed down stubbornly, perhaps in anger, perhaps in pain. (p.211)

この一節は恋人FriedeburgをMartaが彼の部屋の中で待っている場面である。

一行目のglowは彼女の燃えるような愛を、candlelightは揺らめく彼女の心を反映して(reflecting) いるかのようなのである。また、cactusのclear scarlet blossomsで彼女の愛をイメージしており、その彼女はその情熱を表すかのようにpure red dressを身にまとっている。Martaを表現するのに、ローレンスはgirl in redという言い方を何度も用いている。いかに彼女の愛が熱烈なものであるかを描写したかったのであろう。

5.6 名誉と死

軍人らしくFriedburgは何よりも名誉を重んじる。そして、借金のため軍隊を追われるような不名誉を受けるよりも死んだ方がまだいいと思っているのである(→資料7)。

‘... So you've made too many debts, and you're afraid they'll kick you out of the army, therefore your honour is gone, is it? — And what then — what after that?’

She spoke in extreme irony. He winced again at her phrase ‘kick you out of the army.’ But he tilted his chair back with assumed nonchalance.

‘I've made too many debts, and I know they'll kick me out of the army,’ he repeated, thrusting the thorn right home to the quick. ‘After that — I can shoot myself. Or I might even be a waiter in a restaurant — or possibly a

clerk, with twenty-five shillings a week.’ (p.216)

6.0 「ヘビ」のイメージとその検証

物語全体に点在しているヘビのイメージをあげてみれば、次の3つにほぼ集約されて来る。

- a) 相手のあらゆる力を奪い去り、全く無力の状態あるいは忘我の状態にする。
(fascinate, power, eyes, look, attract, ecstasy, exultancy, intoxication, etc.)
- b) 魔的で神秘的なるものを象徴する。
(magic, miracle, enigmatically, spellbound, uncanny, cat, etc.)
- c) [s] という音声でオノマトピアとしてヘビの這う音や様子を表す¹⁸⁾。
(silk, silkily, silky, etc.) (→資料8)

6.1 魔力とcat

上記の語の中、中心となる概念はfascinateである。この単語と密接に結び付く語は、power, eyesである。そしてこの物語に関しては、catというもう1つ特に注意をしなければならぬ語があり、物語中ではFriedeburgを猫のようだとMartaが言う場面がある。

一般に、ネコは魔女を連想させると同時に予言能力が備わっているとされている。つまり、ネコは魔力をもっているということである。これはまさしくヘビとイメージが重なり合う。さらに、このcatという語はFriedeburgの苦悩をも象徴しているのである。それは、Care killed the catという諺とも絡み合い、苦悩は長寿でしぶといネコでさえ死ぬのと同様に、Friedeburgは実際に苦悩のあまりに死ぬほどだからである。

ところで、MartaはFriedeburgに見つめられると、すべての力を奪われたようになりうっとりとしてしまう描写が多い。又、その逆にFriedeburgがMartaの目を見て恍惚とする場面もあるが、いずれにせよやはり目の力によって相手の力をすべて奪い取ることになるのである。

6.2 実例1

‘You know you don’t want me,’ she persisted. ‘You know you don’t really want me. — You only do this to show your power over me — which is a mean trick.’

But he did not answer, only his eyes narrowed in a sensual, cruel smile. She shrank, afraid, and yet she was fascinated.

‘You won’t go yet,’ he said.

She tried in vain to rouse her real opposition.

‘I shall call out,’ she threatened. ‘I shall shame you before people.’

His eyes narrowed again in the smile of vindictive, mocking indifference.

‘Call then,’ he said.

And at the sound of his still, cat-like voice, an intoxication ran over her veins.

‘I will,’ she said, looking defiantly into his eyes. But the smile in the dark, full, dilated pupils made her waver into submission again.

‘Won’t you let me go?’ she pleaded sullenly.

Now the smile went openly over his face. (pp.220-221)

この例では、MartaがFriedeburgに見つめられて力を奪われているところである。FriedeburgのMartaに対する愛は、真実の愛ではなく征服欲なのである。彼はヘビであり、彼女はカエルか何かの獲物のような存在であり、彼女は彼に見つめられると身がすくみ、何の抵抗もできずにいる。そして、結局は彼の言いなりになってしまうのである。ここで特に注意をすべき語句は、power, eyes, shrank, afraid, fascinated, intoxication, dilated pupils, submissionである。目に関してdilated pupilsが使用されているが、大きく見開いた瞳はネコの瞳を連想させ、その魔力が一層強化されるようである。

6.3 実例2

‘You don’t love me — Oh, you don’t love me — I thought you did, and you let me go on thinking it — but you don’t, no, you don’t, and I can’t bear it. — Oh, I can’t bear it.’

He sat and listened to the strange, animal sound of her crying. His eyes flickered with exultancy, his body seemed full and surcharged with power. But his brows were knitted in tension. He laid his hand softly on her head, softly touched her face, which was buried against the bed.

She suddenly rubbed her face against the sheets, and looked up once more.

‘You’ve deceived me,’ she said, as she sat beside him.

‘Have I? Then I’ve deceived myself.’ His body felt so charged with male vigour, he was almost laughing in his strength.

‘Yes,’ she said enigmatically, fatally. She seemed absorbed in her thoughts. Then her face quivered again.

‘And I loved you so much,’ she faltered, the tears rising. There was a clangour of delight in his heart.

大手前女子短期大学・大手前栄養文化学院・大手前ビジネス学院「研究集録」第15号（1995年）

‘I love you,’ he said softly, softly touching her, softly kissing her, in a sort of subtle, restrained ecstasy.

She shook her head stubbornly. She tried to draw away. Then she did break away, and turned to look at him, in fear and doubt. The little, fascinating, fiendish lights were hovering in his eyes like laughter.

‘Don’t hurt me so much,’ she faltered, in a last protest.

A faint smile came on his face. He took her face between his hands and covered it with soft, blinding kisses, like a sort, narcotic rain. He felt himself such an unbreakable fountain-head of powerful blood. He was trembling finely in all his limbs, with mastery.

When she lifted her face and opened her eyes, her face was wet, and her greenish-golden eyes were shining, it was like sudden sunshine in wet foliage. She smiled at him like a child of knowledge, through the tears, and softly, infinitely softly he dried her tears with his mouth and his soft young moustache.

‘You’d never shoot yourself, because you’re mine, aren’t you!’ she said, knowing the fine quivering of his body, in mastery.

‘Yes,’ he said.

‘Quite mine?’ she said, her voice rising in ecstasy.

‘Yes.’

‘Nobody else but mine — nothing at all — ?’

‘Nothing at all,’ he re-echoed.

‘But me?’ came her last words of ecstasy.

‘Yes.’

And she seemed to be released free into infinite of ecstasy. (pp.222-223)

この例もMartaがFriedeburgに魅せられているところであるが、注意すべき語句は、strange, eyes, flickered, exultancy, power, deceived, vigour, strength, enigmatically, fatally, absorbed, quivered, ecstasy, fascinating, fiendish, narcotic, powerful, trembling, mastery, quiveringである。この中でもflickerという語の使い方が絶妙である。この語の意味は「光がちらちら明滅する」ことであるが、「ヘビの舌が震える」ことにも使用される。そして彼が彼女をfascinateする力はfiendishなものであり、ローレンスはその力を魔的なものと見なしている。Friedeburgもecstasyを感じる場所があるが、彼のものは彼女とは異なり、征服感からくるecstasyである。それは実例1ではpower overで表され、実例2ではmasteryで表されていると考えられるのである。

7.0 結語

これまで述べてきた通り、ローレンスは幼少の頃から動物や草花を愛していたが、動物に関しては特にヘビを愛した。彼がヘビに執着したのは、ヘビが神によって呪われ、地を這い回る運命をもった哀れな動物であるが¹⁹⁾、何か魔的で神秘的な力が感じられたからかも知れない。それと同時に、ヘビはその形からphallic symbolism²⁰⁾の中心的存在そのものとして、彼の肉体賛美への大きな役割を果たすことになるからである。

ローレンスは肉体を賛美するあまり、しばしばモラルの面が問われたり、反キリスト教的であると考えられたりする。しかしながら、人間の本質を追求して行けば、必然的にそのような結果になったにすぎない。現代に生きる人間は文明という鎧を身につけ、エゴで固まり本来の人間の姿からかけ離れたものとなっている。現在のキリスト教にしても本来の姿ではないのであると、ローレンスは考えたのである。つまり、現在ではキリスト教は、あまりにも観念論に走りすぎて肉体をおろそかにしている。これでは人間は本当には救われるはずがない。これを超える何か宗教理念が必要となる。それはとりもなおさず、精神と肉体との合一であり、存在の真理への探求²¹⁾となるべきものである。即ち、純粹で汚れなく宇宙との関係を望む²²⁾のである。そしてこの関係を樹立してこそ、真に人間が救われることになるのである。

このローレンスの信念を象徴する存在として、ヘビが果たす役割は重要である。ローレンスは、この重要なカギとなるヘビのイメージを心に描かせる語句を、snakeやserpentという直接的な語を使用せず、間接的にキーワードという形で物語中に散りばめ、全体としてヘビのイメージが読者の心の裡に浮かんで来るように、巧妙な方法でこの物語を完成させているのである。

(注)

1. B.Finney ed.: *D.H.Lawrence Selected Short Stories*, 1982, London, p.530
2. *ibid.*
3. Shakespeare: *Hamlet*, 7, i, 67 What dreams may come, When we haue shufflel'd off this mortal coil, Must giue vs pawse.
4. OED Coilの項参照
5. M.Squires & D.Jackson ed.(1985) p.67
6. M.Schlauch(1955) *Semantic Rejuvenation*の項参照
7. 西村道信(1992) pp.72-73
8. L.Spitzer(1962) p.7
9. *ibid.* p.20
10. 西村道信(1992) pp.74-80
11. *ibid.*
12. マタイ伝 26.14以下、マルコ伝 14.10以下、ルカ伝 22.3以下、ヨハネ伝 13.2以下

大手前女子短期大学・大手前栄養文化学院・大手前ビジネス学院「研究集録」第15号（1995年）

13. KWIC(Key Word In Context)とKWOC(Key Word Out Of Context)の2通りの出力方法をとる。
前者はKey-wordを中心に1行80桁で出力し、Key-wordの直前あるいは直後の単語をアルファベット順にソーティングしたもの。後者はKey-wordを中心に、その行の前後3行ずつ合計7行80桁での出力となっている。
14. 西村道信(1992) p.89
15. Syracuseの王Dionysiusの廷臣であるDamoclesは王を羨んでいたため、王は宴席で彼を王位につけ、頭上から神の毛1本で剣を吊して王位が常に危険なものだと悟らせた。
16. 西村道信(1993) p.61
17. *Lady Chatterley's Lover, The Man Who Died, etc.*
18. 西村道信(1992) p.88
19. 創世紀 3.1-3.14
20. *Phoenix 6*, pp.416-426
21. *Letters*, p.365
22. *ibid.*

参考文献

- A.Aitken et al: *The Computer and Literary Studies*, Edinburgh, 1973
 W.T.Andrews ed.: *Critics on D.H.Lawrence*, Florida, 1971
 A.Bell ed.: *Selected Literary Criticism*, London, 1956
 C.Butler: *Computers in Linguistics*, Oxford, 1985
 S.Hockey: *A Guide to Computer Applications in the Humanities*, London, 1980
 A.Huxley ed.: *The Letters of D.H.Lawrence*, London, 1932
 G.M.Hyde: *D.H.Lawrence*, London, 1990
 A.Ingram: *The Language of D.H.Lawrence*, London, 1990
 A.Kenny: *The Computation of Style*, Oxford, 1982
 F.R.Leavis: *D.H.Lawrence*, Chicago, 1955
 J.Ruderman: *D.H.Lawrence and the Devouring Mother*, D.U.P., 1984
 M.Spilka ed.: *D.H.Lawrence*, New York, 1963
 M.Squires & K.Cushman ed.: *The Challenge of D.H.Lawrence*, U.W.P., 1990
 M.Squires & D.Jackson ed.: *D.H.Lawrence's "Lady"*, Georgia, 1985
 J.Worthen: *D.H.Lawrence*, London, 1989
 金谷展雄: 『D.H.ロレンス論』南雲堂、1988
 柴田多賀治: 『ロレンス文学の世界』八潮出版社、1974
 西村孝次: 『ロレンスの世界』中央公論社、1970
 西村道信: 特定作家の文体研究、『英語英文学研究とコンピュータ』齊藤俊雄編、英潮社、1992
 : 「死んだ男」における文体的特徴、大手前女子短期大学『研究集録』vol.13、1993
 : 「死んだ男」における文体と色彩表現、大手前女子短期大学『研究集録』vol.14、1994

The Mortal Coil の文体とシンボリズム

資料 1

topaz signet-ring on his finger made yellow lights. Ah, if only his hands were r
in the sky. In the streets below the yellow street-lamps burned small at interva
ell! What did it all mean? Pale, sulphur-yellow lights spotted the livid air, an

資料 2

, and looked up once more. /'You've deceived me,' she said, as she sat beside hi
sat beside him. /'Have I? Then I've deceived myself.' His body felt so charged w

資料 3

arries us through all our shame and torture. He knew the people talked about him
m completely in his power. He could torture him as much as he liked. /'Yes.' He
new shame, some new shame, some new torture! His body moved on. So it would move
ade of life a long, slow process of torture to the soul. Strange, that it was no
re not me,' he said. /Why would she torture him? She seemed to enjoy torturing h
not understand. -- But she loved to torture him, that was the truth. /'Why shoul
sum= 6
ted. /He lifted his face, white and tortured, his grey eyes flaring with fear an
moulding of his back. And something tortured her as she saw him, till she could
sum= 2
e torture him? She seemed to enjoy torturing him. The thought of his expulsion f
sum= 1

資料 4

e mouths of the soldiers. His life was to him like dead, cold bread in his mouth
. /As he neared his own house, the snow was peppering thinly down. He became awa
re of some unusual stir about the house-door. He looked -- a strange, closed-in
wagon, people, police. The sword of Damocles that had hung over his heart, fell.
O God, a new shame, some new shame, some new torture! His body moved on. So it
would move on through misery upon misery, as is our fate. There was no emergence
, only this progress through misery unto misery, till the end. Strange, that hum
sum= 1

資料 5

biting huge bites from their hunks of grey bread, or cutting off pieces with the
, for he felt as cold-soddened as the grey, cold, heavy bread which felt hostile
ted his face, white and tortured, his grey eyes flaring with fear and hate. /'Wo
sky had gone one dead, livid level of grey. It seemed low down, and oppressive.
life was lived in a formless, hideous grey structure of hell! What did it all me
sum= 5

大手前女子短期大学・大手前栄養文化学院・大手前ビジネス学院「研究集録」第15号（1995年）

資料 6

fast prisoner there, murmuring with tender, triumphant delight: 'Dear! Dear!' /
sum= 1

tiful, and pathetic. He touched her tenderly with his finger-tips, then suddenly
sum= 1

ening, with this look of brilliant tenderness seeming to glitter from her face.
sum= 1

ither side, so that both the far walls were low. Against one, on one side, was a
single bed, opened for the night, the white over-bolster piled back. Not far fr
om this was the iron stove. Near the window closest to the bed was a table with
writing materials, and a handsome cactus-plant with clear scarlet blossoms thro
its bizarre shadow on the wall. There was another table near the second window,
and opposite was the door on which hung a military cloak. Along the far wall, w
ere guns and fishing-tackle, and some clothes too, hung on pegs -- all men's clo

sum= 1

資料 7

s outside your career?' /'Outside my honour -- none.' /'And might I ask what is
you out of the army, therefore your honour is gone, is it? -- And what then --
one.' /'And might I ask what is your honour?' She spoke in extreme irony. /'Yes,
sum= 3

sum= 0

ion which carries us through all our shame and torture. He knew the people talke
, fell. O God, a new shame, some new shame, some new torture! His body moved on.
g over his heart, fell. O God, a new shame, some new shame, some new torture! Hi
call out,' she threatened. 'I shall shame you before people.' /His eyes narrow
sum= 4

資料 8

xtravagantly-made gown of dark purple silk and dark blue velvet. She was followe
e edge of the chair-back, her crimson silk garters hung looped. /But do not look
houlders. Her hat was of black glossy silk, with a sheeny heap of cocks-feathers
sum= 3

othed in the elegantly-made dress of silky red stuff, the colour of red earth. S
sum= 1

ing. Her gown of reddish stuff fell silkily about her feet; she looked tall and
sum= 1